

刷り込まれたグレート・マザーへの鉄の意志

——『千枚皮』(KHM六五)の深層心理学的解釈——

梅 内 幸 信

第一節 人間の模倣本能

模倣する本能を人間の本質的一面と見なす考えは、すでに古代ギリシアにおいて見いだされる。ギリシアの唯物論哲学者であるデモクリトス(Demokritos, um 460 v.Chr.- um 370 v.Chr.)は、模倣するという点において、人間は動物の弟子であるとし、「織ったり縫ったりすることについては蜘蛛の、家造りにおいては燕の、歌においては甘い声の白鳥やナイチンゲール^①」の弟子であると考えた。他方、彼はまた、「人は善くあるべきである、もしくは善き人を模倣すべきである^②」という見解によって、模倣の本能を倫理的価値観と結びつけたのである。模倣に関する二つの見解、すなわち、自然の模倣と価値的なるものの模倣という見解をその形而上哲学において統合したのは、かの偉大なギリシアの哲学者プラトン(Platon, 427 v.Chr.-347 v.Chr.)であった。プラトンの「神と人とは理性という黄金の糸で結ばれており(『法律』)、ロゴスを有するという固有のあり方において人は本来的に神に似ている^③」という考えは、模倣概念との関連において非常に示唆に富む見解である。この形而上学的なミメーシス(模倣)の理念を、現実的な意味において焼き直したのが、アリスト

刷り込まれたグレート・マザーへの鉄の意志

テレス (Aristoteles, 384 v. Chr.-322 v. Chr.) である。彼は、その『詩学』において、ポイエーシス (創作・創造) はミメーシスであり、悲劇のポイエーシスは「人生と行為のミメーシス」⁽⁴⁾として、歴史的記述とは異なり、「起こりうること」「普遍的な(生の)ありよう」⁽⁵⁾を語ることから、ミメーシスはもはや単なる現実的事象の模倣ではないと考えたのであった。

ミメーシスの概念に関しては、ギリシア時代以来延々と種々の論議が巻き起こされてきたが、現代に至ってアウエルバッハ (Erich Auerbach, 1892-1957) は、一九四六年に、ミメーシスという概念をキーワードとしてヨーロッパ文学における現実描写を見直した大著『ミメーシス』⁽⁶⁾を公刊している。また、動物の模倣本能に関して、一九七三年にノーベル生理学医学賞を獲得したオーストリアの動物学者ローレンツ (Konrad Zacharias Lorenz, 1903-1989) は、ハイイロガンの雛が生後一、二日以内に「自分の周囲で動くもの」を、あたかも親と見なして追従する「刷り込み」現象を発見し、このことを契機として、生得的な固定的行動型をもたらす「リリーサー」を研究している⁽⁷⁾。このように、人間の模倣本能に関する概念の歴史的過程を簡単に垣間見るだけでも、模倣本能が人間においていかに本質的な役割を果たしているかが分かるであろう。上述した模倣概念を極めて善意に受け止めれば、人間は、生まれて後短期間に、自分の周囲にいる両親の善い面を自分の魂に刷り込むと考えられる。しかしながら、人間社会を観察し、少なからず悪がはびこっている現実を考慮に入れると、「両親の善い面」のみを刷り込むという点は、現実世界において必ずしも妥当性をもたないのかも知れない。とはいえ、その他の部分、すなわち「人間は、生まれて後短期間に、自分の周囲にいる両親の行動様式を自分の魂に刷り込む」ものであるという点は、かなりの妥当性を獲得するであろう。ところが、驚くべきことに、さきほど部分的に除外した「両親の善い面を刷り込む」という点までもが見事に当てはまると思われる童話が存在しているのである。それは、『グリム童話集』における『千枚皮』(KHM六五)と題された次のような物語である。

第二節 近親相姦の危機

昔、あるところに王がいて、この王には「金の髪のお妃さまがあり、お妃さまは、それはもう美しく、この世にくらべる人がいないほどの美人」であつた。ところが、この妃は、まもなく病の床に臥し、自分の死期を悟ると、王に次のように語る。

「わたくしが死んだのち、もし、また結婚なさるおつもりであるならば、わたくしと同じくらい美しく、わたくしと同じような金の髪の人でなければ、結婚なさらないでください。このことを、わたくしにかたくお約束ください。」

(S.350)

「自分と同じように美しく、自分と同じような金の髪をもった女性とでなければ結婚しないこと」を夫に求める妃の遺言は、なんとも奇妙なものである。自分よりも器量において劣った女性と結婚することは、妃の自尊心を傷つけるとも言うのである。それとも、このような難しい遺言を遺さなければ、この王は、安易に後妻を迎えてしまうような男性なのであろうか。ユングの深層心理学によれば、男性の無意識の中にあつて抑圧されている異性原理、すなわちアニマは、その成長過程に応じて、「娼婦——聖女——賢女」といったイメージをもつと言われる。この図式に従えば、この王の女性に対するイメージは、せいぜい「聖女」どまりであらうと推測される。死んでゆく妃としても、やはり、心配せずにはおられないならかの理由があるのであろう。

さて、王は、長いこと悲しみに暮れ、二度目の妃を迎えるなどということは思いもよらなかつた。しかし、国政上相談

役たちが、新たな妃を迎える必要を国王に進言するに至り、あちこちに使いの者が出されても、亡くなった妃に匹敵するような花嫁は見つからなかったのである。ようやく、ふさわしいような美人が見つかったかと思えば、亡くなった妃のような「金の髪の」女性ではないのであった。ところが、あるとき王が、自分の一人娘をよく眺めてみると、この娘が、なにからなまでに母親そっくりの美人なのであった。そこで、王は、この自分の娘に急に激しい愛情を覚えて、自分の娘と結婚すると言いだすのである。これを聞いて、相談役たちは、「父親が実の娘と結婚することは、神さまが禁じております。罪深いことから、良い結果が生まれたためしはございません。お国も、その災いをこうむって、滅びることになります。どうぞ」(S.351)と諫めて、王がその決意を翻すよう促すのであるが、それにもかかわらず王は、その決意を変えようとはしない。娘の方は、父親の決意を聞いて、相談役たち以上に驚くのであるが、しかし、その決意を変える望みを捨てず、父親の決意を変えようとして、次のような難題を父親に提示する。

「わたしが、おとうさまの願いをかなえます前に、まず、わたしは、三着の衣装をいただきとう存じます。その一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものをいただきとう存じます。さらには、千種類の毛皮から作られました外套を一着いただきとう存じます。そのためには、おとうさまのお国にすむ動物という動物がみな、その皮を一切れずつさしださなければなりません。」(S.351-352)

ところが、この難題をもとめせず王は、国中で一番機織り上手の乙女たちにこれら三着の衣装を織らせ、また、国中の動物を全部捕えさせて、千種類の毛皮を集め、これらを縫い合わせて一着の外套を作り上げさせてしまうのである。そ

の挙げ句、「あすは結婚式じゃぞ」(S.352)と王が言うに及んで、娘は、父親の決意を変えることは不可能だと悟り、逃亡する覚悟を決める。このように、父親の命令に従わず、自らの判断に基づいて自分の行動を決定しているという点において、この姫は、すでにある程度の自立精神を身に付けていると言つて良いであろう。こうして、真夜中に姫は、自分の宝箱の中から「金の指輪」と「小さな金の糸車」、「小さな金の糸巻」を取り出し、例の三着の衣装を「クルミの殻」の中へしまひ込み、「千枚皮の外套」を羽織り、顔と両手に煤を塗つて、真つ黒にする。これら三着の衣装と三つの宝は、物語の後半において、かなり大きな役割を果たすことになる。この段階ですでに、将来のことについて用意周到な準備をしている点において、姫は、この種の行動様式をやはり、自分の母親から学んだか、あるいは無意識のうちに母親の行動様式を刷り込んだとしか考えられない。やがて、旅の準備を整えると、姫は、城を出て、夜通し歩いて大きな森の中へたどり着き、そこで疲れて、木の洞の中に入って眠り込んでしまうのである。

第三節 試練の克服

あくる日、真昼になつても姫は、眠り続けたままであった。すると、その森を所有している王が、たまたまこの森で狩をしていたが、獵犬が木の洞の中で寝ている姫を嗅ぎつけて、木の周りで吠えたのであった。王の命令を受けた狩人たちによつて生け捕りにされると、姫は、「あたしは、父母にも見捨てられた、あわれな子どもです。どうか、あわれんで、いっしょにつれていってください」(S.353)と訴える。こうして姫は、王の城の台所の灰かき集めの仕事のために雇われることとなる。城に着くと、狩人たちは、姫に「階段の下にある、日のさしこまない小さな家畜小屋」(S.353)をあてがう。それ以来、姫は、本来の高貴な身分にもかかわらず、台所で「まきや水を運んだり、火をおこしたり、鳥の羽を

むしつたり、野菜をより分けたり、灰をかいたり、いやな仕事」(S.353)をなんでもこなすのである。「姫」という身分に生まれた女性が、父親との近親相姦という危機を回避するために、止むを得ず他国に逃亡したとはいえ、果たしてそう簡単に、「家畜小屋」に住んだり、あらゆる辛い台所仕事を、なんらの嘆きや涙無しに堪えきれれるものであろうか。この姫の強い意志と勇気と忍耐を考察するとき、読者は、賛嘆の念ばかりではなく、畏怖の念すら感ぜざるをえない。

姫は、「千枚皮」と呼ばれ、長い間非常に惨めな生活を送らざるをえなかった。ところが、ある日城で宴会が開かれることになる、千枚皮は、料理番に頼んで三〇分だけ上の階に行つて、宴会の様子を眺めることを許されるのである。料理番の許可をもらつと、千枚皮は、自分の家畜小屋に戻り、毛皮の外套を脱いで、顔と両手に塗つてある煤を洗い落とし、クルミを開けて「お日さまのように、金色に輝く」衣装を身にまとい、宴会に参加する。すると、宴会に集まつた人々は、どこかの国の姫に違いないと考える。王は、千枚皮の美しさに驚きながらも、千枚皮に踊りの相手を申し込む。しかし、踊りが終わると、千枚皮は、宴会場から姿をくらます。集まつた人々にも、さらには、見張りたちにも、千枚皮の行方は全く分からないのであつた。

千枚皮はいえ、自分の小さな家畜小屋に駆け込んで、すばやく衣装を脱ぎ捨て、顔と両手を黒く塗つて、毛皮の外套を羽織り、元の姿に戻つていたのである。こうして、千枚皮が台所で灰をかき集めようとすると、料理番が、王に差し上げるスープを作ることを千枚皮に命ずる。千枚皮は、思う存分腕を振るつて、パンスープを作る。ところが、このスープが出来上がると、千枚皮は、自分の小さな家畜小屋から「金の指輪」を取つてきて、これをスープを盛りつける深皿の中に置く。王は、それほどまでに美味しいスープを食べたことがなかった。さらに、食べ終わつて、皿の底に金の指輪を発見すると、訝しく思い、料理番を呼んで、誰がスープを作つたのかを問いただす。料理番が、スープを作つたのは千枚皮であることを王に白状すると、今度は千枚皮が王によって呼び出されることとなる。王は、出頭した千枚皮にその素性

を尋ねるが、しかし、千枚皮は、自分を卑下し、次のように答えるばかりである。

「わたしは、なんの役にも立たぬものにございます。そそうをして、履物を頭に投げつけられるのが関の山にございます。」(S:355)

千枚皮のこの返事は、この場面において若干唐突な印象を与える。しかしながら、この返事こそが、ペローの童話『ろばの皮』から影響を被っているという理由で第二版において削除された『ネズミ皮の姫』の『千枚皮』に与えた「筋の亀裂」に他ならないと解釈されるのである⁽¹⁰⁾。もちろん千枚皮は、王が金の指輪のことを聞いても、存じませんと応えるのみである。こうして、千枚皮は、王のもとから下がるのであるが、しばらくすると、再び宴会が開かれることとなり、またしても同じような場面が繰り返される。しかし、二度目に千枚皮は、「お月さまのように銀色に輝く衣装」を身にまとう。そして、王と踊った後に台所へ逃げ帰ると、パンスープを盛りつけた深皿の底に、今度は「金の糸車」を置く。この後、またしても、ほぼ一回目と同じような事態が展開することとなるのである。

しかしながら、千枚皮が、「お星さまのように青白く輝く衣装」を身にまとって、三度目の宴会に出ると、王は、踊りの最中に、こっそりと千枚皮の指に例の金の指輪をはめるという手段を採る。さらに、舞踏会を長引かせるように命じておいた王の策略によって、千枚皮は、一時間以上も宴会場に留まらざるをえなくなり、必死に自分の小さな家畜小屋に逃げ帰っても、美しい衣装を脱ぎ捨てる余裕もなく、その上から毛皮の外套を羽織るだけで精一杯で、また、顔と両手に残らず煤を塗ることができず、指が一本白いままになってしまっていたのである。その状態で千枚皮は、台所に戻って、例のパンスープを作り、三度目には「金の糸巻」を皿の底に置く。三度目に千枚皮が呼び出されると、今度はやはり王も、

煤の塗られていない白い指ばかりではなく、踊りの間にこっそりはめておいた金の指輪にも気づくのである。そこで、王は、千枚皮の手をしっかりとつかんで、握りしめる。思わず千枚皮がその手を振りほどいて逃げようとしたその拍子に、毛皮の外套が少し口を開けて、そこから星の衣装の輝きが漏れでるのである。すると、王がその外套をつかんで引きはがし、千枚皮の金の髪と本当の姿が、全身きらびやかに輝いて現れたので、千枚皮は、もはや身の隠しようがないのであった。千枚皮が絶世の美人であることに気づいた王は、言うまでもなく、千枚皮を花嫁として迎えるのである。

第四節 三つの手段

『千枚皮』の物語を、主人公の行動様式に着目して跡付けるとき、主人公の千枚皮から、「女性の鉄の意志」というものを感得しないではおられない。物語の冒頭において、父親が自分と結婚すると言い張ったときにも、彼女は、すぐさま自暴自棄になることもなく、なんとか父親の決意を変えようと試みている。この態度を見ても、姫は、すでにある程度の智慧を身に付けていると見なさざるをえない。姫の母親も、姫が生まれて、だいぶ成長してから死んだと推測されるので、この母親が姫に「女性の生き方」をある程度教えたか、あるいは姫自身がその模倣本能によって「刷り込んだ」ものと推測される。ある程度の智慧を身に付けていることを前提としなければ、その後の姫の一貫した行動様式は、到底説明のつかないものである。

姫が近親相姦の危機を避けるために、城を出るに当たって、彼女は、父親から婚礼の準備のためにもらった「お日さまのように金色に輝く衣装」と「お月さまのように銀色に輝く衣装」、「お星さまのように青白く輝く衣装」の三着をクルミの殻にしまい込み、さらには、自分の宝箱の中から「金の指輪」と「小さな金の糸車」、「小さな金の糸巻」を携えて行く。

